

KUMADAI TSUSHIN

熊大通信

Vol.21
Jul.2006

特集

知と社会
Vol. 21

大学が、まちにやって来た

熊本大学工学部「まちなか工房」



Kumamoto University

国立大学法人 熊本大学



熊本大学の約束(KU4U)

Kumamoto University For You

私たちは、熊本大学を開かれた心地よい環境の大学として、次の4つのことに全力を投入します。

Upgrade

未来を生き抜くプロフェッショナルの養成

Union

地域連携と社会貢献

Unique

新たな知的価値の創造

Universal

留学生教育と国際貢献

CONTENTS



1 知と社会 Vol.21

大学が、まちにやって来た

熊本大学工学部「まちなか工房」

6 夢の実現 Act.9

心理学は、人生をより良く生きる力になる

教育学部附属教育実践総合センター教授 吉田 道雄

8 地域とともに

研究成果を地域へフィードバック

地域を知り、地域で学ぶ土木計画学
土木計画学 社会基盤計画学研究室

10 卒業生を訪ねて

自分を制約しない生き方を 平成的ミーハーのススメ

株式会社 西鉄エージェンシー コンテンツ本部 CR センター
コピーライター/CMプランナー/ディレクター 近藤 純さん

12 国際交流

熊本大学から世界をめざす学生たち

14 熊大 INFORMATION

おすすめの一冊 附属図書館長 大学院医学薬学研究部教授 中山 仁
熊本新哲学の道 政策創造研究センター 吉住 修さん



表紙 Penguin 材料(包装紙、木) 幅25 奥行き20 高さ34(cm)

作者/中村靖浩 NAKAMURA YASUHIRO

プロフィール：熊本県天草生まれ。熊本大学教育学部美術科卒業後、ゲーム制作会社でグラフィックデザイナーとして7年勤務。今年からフリーのイラストレーター、アーティストとして活動を開始。パソコンによるイラストの制作と同時に、紙を使った立体なども作成しています。

コメント：ペンギンです。紙の張り子で制作しています。今回のペンギンは、ほぼ実物大の大きさです。凄くリアルというより、少し荒めの表面処理で手の跡を残す事によって、手触りや存在感を出すようにしています。

<http://www1.newweb.ne.jp/wb/spankposs/>



特集

熊本大学工学部「まちなか工房」 大学が、まちにやっ て来た

豊かな知識、想像力、そして感性。そこから強い創造する力が育つ。

熊本大学では、学生の創造力を育て、

世界をリードする優れた技術者やデザイナーを育成しようとしている。

そのために、工学部では「ものづくり創造融合工学教育事業」に取り組み、

事業の一環として熊本市上通のビルの二室に「まちなか工房」が開設された。

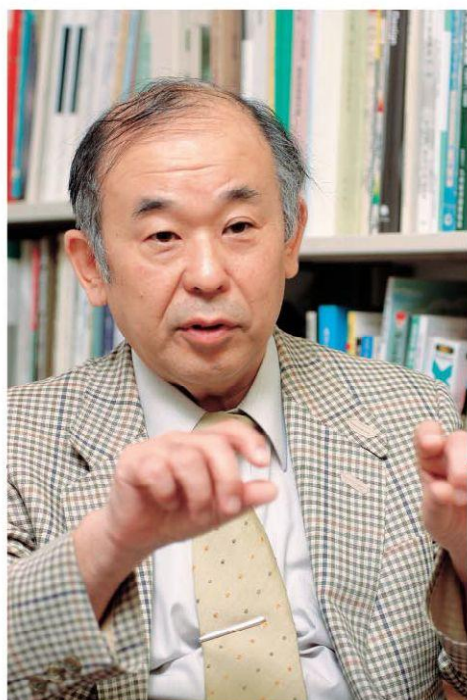
特集

SPECIAL EDITION



「ものづくり教育」の改革

「社会も学生も、時代の変化とともに変わっていきます。大学も、それに応じて教育の方法を変えなければなりません。その取り組みのひとつが、『ものづ



ものづくり創造融合工学教育センター長の西角光男教授

くり創造融合工学教育事業」です」と話すのは、熊本大学大学院自然科学研究科の西角光男教授。ものづくり創造融合工学教育センター長であり、まちなか工房代表として、いろいろな取り組みをリードする存在だ。



「学生諸君は暗記ものや公式を使った計算は得意です。しかし教科書で読んだことが、具体的なモノや出来事とどう対応するかなど、体感的に理解できてないことが多い。また物事をじっくり観察して背後に潜む問題を洞察するような力が弱いと感じることもしばしばです。これでは工学の目的である、『社会が求める新しい価値を作り出す』ことは困難です」と西角教授。「製品を分解し組み立てながら技術や知識を体感的に学ぶ機会や、具体的な問題の解決に向けていろいろな知識や技術を動員して対策を考え試作・試行する機会を増やすこと。いわゆる座学に加え、実験・実習や問題解決・提案型演習授業を充実するのが大切です」。これが『ものづくり創造融合工学教育事業』の目

的だそつだ。また、「工学分野のひとつである『まちづくり』」についても、まちなかで生活しながら、臨牀的にまちづくりの課題を発見しその解決に向けた技術や知識を研究する場、それがまちなか工房です」と両角教授。「ここを一つの拠点として『熊大工学部卒』が、日本の、そして世界のブランドとなるべく『熊大スタイル』の優れた教育プログラムを確立したいと考えています」

まちに触れ、まちの視点で考える

まちなか工房で各教授と学生たちが取り組む研究には、「白川を中心としたまちづくりプロジェクト」、「熊本電鉄の市電乗り入れ・LRT化による熊電再生および中心市街地活性化プロジェクト」、「熊本中心市街地の公共空間整備計画プロジェクト」などがある。

両角教授をはじめ、各教授の研究室



研究発表する三好涼子さん(中央)



まちなか工房事業教員、前田芳男さん

に所属する学生が集まりここで勉強会が行われることも多い。日本建築学会が主催する設計競技「近代産業遺産を生かしたブラウンフィールドの再生」に参加する大学院自然科学研究科修士1年の三好涼子さんは、勉強会で「熊本電鉄の御代志く菊池間廃止路線の線路跡地の再利用」に関する提案を発表。参加者からたくさん質問を投げかけられることで、提案にさらなる磨きがかかる。「大学の中でやっていたら、どうしても現実から離れがち。まちというものに触れ、まちの視点で考えるという点で、ここでの勉強会はありがたいと思います」と三好さん。まちなか工房事業教員の前田芳男さんは、「頭の中で“モデル的”に考えたものが、現実的には果たしてどの程度のものなのか。研究拠点が『まちなか』にあることで、常にアイデアをフィードバックできるんです。その効果を求めて大学が“まち”に出てきた。学生にとっても

恵まれたことです」。

まちの住人たちが学び始めた

まちなか工房のもうひとつの大きな目的が、研究教育の成果を「まちづくり」に還元すること。その代表的な活動が、月一度開催されている「まちづくり学習会」だ。教員、学生、そして地元商店街関係者らが集まり、中心市街地のまちづくりについて学び、将来像を考えていく。今年4月には、工学部が調査した、郊外大型小売店の進出による県道熊本益城大津線の交通渋滞予想について参加者たちが議論を展開。5月には「まちなかの下水道の仕組みと今後について」と題し、合流式下水道の課題と運用についての勉強会を行った。そして7月には、「光でまちを演出する」と題した勉強会を開催。沖縄、首里城のライトアップを手がけた近田玲子氏を講師に招き、国内外の事例を見ながらライトアップデザインを学ぶ。業者に頼み、ただ電球を飾るだけではなく、どうすれば魅力的になるのか、本物の演出とは何かをきちんと学んだ上で、熊本市街地のライトアップを実現させようというプログラムだ。机の上の勉強を、しっかりと現実に生かそうという参加者の意欲が、一つひとつ形になっている。



上通商栄会の泉冬星会長

研究を社会に還元する

「まちづくり学習会」には、熊本中心市街地の6商協(上通商栄会、熊本中央繁栄会連合会、下通繁栄会、新市街、駕町通り、安政町)も参加。上通りの老舗、泉洋服店の社長であり、上通商栄会の泉冬星会長も、この勉強会に毎月参加する一人だ。5月の排水と下水道に関する勉強会は、かねてから坪井川や白川の汚染を気にかけていた泉会長が提案し実現した。「魅力的なまちづくりに

は、環境のことも考えないといけない。そういうことに熊本大学が気づかせてくれました」。勉強会に招く講師陣も、大学や教授たちのネットワークが役に立っていると泉会長。「まちなか工房は、大病院のイメージ。研究を社会に還元する、医学部における大病院の役割を担っていると考えています」。郊外大型小売店との競合にも、中心市街地がタッグを組んで対応しなければならぬ時期にある。「工房オープン時期も、タイミングがよかった。大学と組んで、私たちももっと勉強しなければなりません」

また、熊本市都市整備局開発公園部・市街地整備課の吉野勇課長も、毎月、係の全員で「まちづくり学習会」に参加。「大学の研究は、理想論に走る傾向が強いのが実情です。しかし、私たち行政は、実現性を第一に考えるので、現実的すぎる。そのギャップを埋める場所がまちなか工房だと考えています」。そして、「大学、民間、行政が協働してまちづくりに取り組む場を、主体的、精力的に作ってもらったことに感謝している」

と語る吉野課長。こうしたいという地元の夢や希望に、大学の知識と、実現に向けた行政の裏づけが揃えば、魅力あるまちづくりは加速する。

大学と“まち”の間に架かる橋

平成18年1月には、まちなか工房を拠点にした研究「中心市街地の時間貸し平面駐車場の有効活用のための方策と支援策の提案」が、第一回土木計画学公共政策デザインコンペで最優秀賞にあたる「黒川賞」を受賞。これは、大学院自然科学研究科の溝上章志(しょうし)教授が指導、大学院生岡本欣久(よしひさ)さんら学生、そして、上通商栄会などで構成される幹事会による研究である。中心市街地に増加するコインパーキングの利用時間や利用者へのア



熊本市市街地整備課の吉野勇課長



熊本大学大学院自然科学研究科の溝上章志教授

COLUMN

時には、ざっくばらんに
～ご近所懇親会

まちなか工房は年に一度、ご近所さんとの懇親会を開催している。懇親会の始まりに学生が発表する10分程度の研究発表は、懇親会の“酒の肴”だ。参加者の一人、並木坂通りで舒文堂河島書店を営む河島一夫さんは、工学部建築科4年の上田英寿さんとビール片手に「まち談義」。「学生さんたちが想像以上にいろんなことを研究しているなど感心します。熊本出身以外の学生さんが多いけど、外から来る人が気づく熊本の魅力もあるからね。学園都市として熊本を売り出すのもいいですね」と河島さん。上田さんも「以前はまちなかを調査する時など、怪しげに思われてやりにくかったと先輩から聞きました。今は住民の方々とこういう交流があるから、フィールドワークもやりやすくなりました」



河島書店経営の河島一夫さんと学生の上田英寿さん

ンケート、地権者の土地利用に対する満足度などを調査、有効活用のための施策を提案した。「地権者への聞き取り調査など、幹事会の協力がなければとても難しかったでしょう」と溝上教授。「そういう点で、受賞はまちなか工房あつてこそ」と語る。「まちなか工房1年目は、勉強会などを通し知識づくりとまちなかとのネットワークづくりに力を注ぎました。2年目は、社会実験など、実践的“な”ことにより積極的に取り組み、施策や提言を実際の形にしていくことが目標です」

社会実験などのプロジェクトに、まちなかの住人の力と学生の力は欠かせない。「学生たちは調査を通し、実際にま

ちに出て、そこでデータを集める重要性を体感する。また、社会実験では、企画からマネジメントまで、“現場”と大いに関わる仕事を経験し、社会に出る前の自信を身につけます。そしてそれが同時に、大学にとつての社会貢献にもなるのです」と溝上教授。

「まちなか工房」は、教育の改革と地域貢献という二つの目標を掲げ、大学と“まち”の間に架けられた橋である。多くの人の往来が続くうち、いつかその先に、魅力ある熊本のまちが完成するに違いない。



夢の実現

Dreams come true

Act 9

教育学部
附属教育実践総合センター

教授 吉田 道雄

わからないから、研究する

「私と話して、どこですか。落ち着かないことはないですか？」と吉田教授。もう40年近く心理学研究に携わっているため、誰かと話していると、相手が、教授に自分が見透かされているのではないかと思いきや、不安になるらしいと笑います。

「人の心がわかるなど、とんでもないですよ。わかるわけがない。わからないからこそ研究するのです」。心理学とは、人の心理や行動について研究し、「そうだったのか」とその原因を発見し、「それじゃ、こうしたら良い」コミュ

心理学は、 人生をより良く生きる力になる

集団との関わりを通して人間を理解する。

これが、吉田道雄教授が専門とする、

「グループ・ダイナミクス(集団力学)」の目的です。

研究を活かし、「リーダーシップ・トレーニング」などの

公開講座も行っている教授に話を伺いました。

「二ヶーションがとれるのではないかと考え行動するための学問。「人生をより良く生きるための基礎的なスキルを身につけ、自分の可能性を広げられるものだと思います」

そうした心理学の中でも、吉田教授が携わる「グループ・ダイナミクス」は、集団との関わりを通して人間を理解することが目的。「世の中にある、いろいろな集団で起こる事柄の共通点を探るのがとても楽しいんです。人の心理や行動の法則を探究していくと、学校や会社といった特定の組織に固有なものだけでなく、けっこう同じ法則がはたらいっていることがわかります。親子と

いう「集団」にも、リーダーシップの法則が当てはまると教授は言います。

「人間力」が大切

「グループ・ダイナミクス」の研究から、良好な対人関係を築くにはどうすればよいかが見えてきます。「望ましい対人関係の構築や集団を率いるリーダーシップは、『専門力』と『人間力』の掛け算で生まれます」と吉田教授。職場においては、仕事についての「専門力」がなければもちろんダメ。しかし、人とコミュニケーションをとるために必要な知識や技術である「人間力」も欠かせません。「専門力」に「人間力」を掛け合

リーダーシップ発揮に求められる二つの力

テクニカルスキル (専門力)	Ts 専門力だけあって、人間力に欠けている状況 ③	Ts, Hs 専門力と人間力の両方を兼ね備えている状況 ①
	ts, hs 人間力も専門力も低い状況 ④	Hs 人間力だけあって、専門力に欠けている状況 ②

ヒューマンスキル (人間力)

集団の力を最大限に発揮できるのは、リーダーが専門力と人間力を兼ね備えた①のエリアにいること。②では単なる仲良しクラブで、目標の達成はおぼつかない。また③のエリアでは、目標は達成されても、組織の人間関係がぎくしゃくして永続的で発展的な活動は望めない。④のエリアは目標を達成することができないばかりか、組織が崩壊してしまう危険性もある。

テクニカルスキル (Ts 専門力) : 仕事や目標を達成するために必要な専門的な知識や技術
ヒューマンスキル (Hs 人間力) : コミュニケーション能力などのような他人と良好な関係を築くことができる知識や技術

わせれば、リーダーシップの力は2倍にも3倍にもなるのです。「しかし、人間力は恐ろしい性質を持っていてゼロになることもある。それどころか、マイナスにだってなる。つまり、『人間力』がマイナスなら、『専門力』を持っていて仕事ができるのに、かえって嫌味すら見えてしまう。これでは、職場の中で良好な対人関係を築くことはできません」。吉田教授は大学の公開講座で「リーダーシップ・トレーニング」も開講。教育、医療、産業界、各団体などさまざまな分野の方々が参加しています。

事故が起きると話題になるヒューマンエラーも、ハード面はほぼ100%安全なのに、人間に「これはまずい」という、危険に対する「感受性」がないから起こると教授は言います。「『仕事に対する責任や誇り』が、こつした感受性を強くさせる。しかし、それも職場の仲間や上司との人間関係などが大きく影響するのです。つまり、『危機管理』においても、対人関係の在り方が、非常に大切なのです」

魅力と情熱は今も

吉田教授がこの学問に初めて興味を持ったのは高校生の頃。グループ・ダイナミックスを日本に導入した三隅不二(みすみ・じゅじ)先生が、企業

社員が、働く意欲を持ち、生産効率を上げるにはリーダーシップが大切だという研究を行い、客員教授としてアメリカで自分の理論を展開して帰国したという新聞記事を父親から見せられた時です。「父が『こんなおもしろそうな質問があるのか』と言ったのが『刷り込み』になったのかもしれない」

大学に進学し、ほかでもない三隅先生の研究室のドアを叩いた吉田教授。部下が上司の行動を評価するリーダーシップ調査のため、いろいろな企業に三隅先生と出向きました。「調査して現状を把握したら、つぎはその改善を考えることが求められた。そこで、三隅先生を指導者に、望ましい対人関係を作るためのトレーニング法を開発することになった。これがやみつきになった

んですよ」と笑います。なんと大学2年生で「日本グループ・ダイナミックス学会」にも所属。「いまは大学院生でないと入会できないんです。それほどこの学問に魅力を感じた。けっこう早熟でしたが、その気持ちは今も変わりません」

「私と関わりを持つていただいた方から『役に立った』ということばをお聞きすると幸せになるんです」と研究の楽しさを語る吉田教授。自身のホームページに「味な話の素」という文章を毎日書いています。「集団や対人関係の問題、非行や依存症など、さまざまな話題の中に、人間の不思議さや面白さが感じられると思います。高校生諸君も、ぜひ読んでみてください」



PROFILE

吉田 道雄(よしだ・みちお)

福岡県出身。九州人学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。九州大学助手、鹿児島女子短期大学講師を経て、熊本大学教授、博士(学術)。(財)集団力学研究所所長。著書に「人間理解のグループ・ダイナミックス」(2001年、ナカニシヤ出版)など。

「人間を理解するためには、集団の視点が欠かせません。ですから、私はいつも人間行動を観察しています。といっても、それほど大げさなことではありません。まあ、人間ウォッチングが好きなんですよね」と吉田教授。



吉田教授のHP、「味な話の素」。「3年を超えたからもう1000回以上書きました。止める気はなくて、2、3日でも更新がなかったら『吉田も死んだか』と思ってください」と公言しています

URL : <http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~yoshida/>



リーダーシップ・トレーニング中の吉田教授。「グループ・ダイナミックスを活用したリーダーシップ・トレーニングは縁の下の力持ち。参加者のみなさんが人間力を身につけるため、100分の1くらいでも貢献できれば、と思っています」

本当に必要な交通とは何だろうか

2005年9月、柿本助教授は、植木一山鹿、玉名一荒尾の各方面の路線バス利用者乗降調査を行いました。参加したのは、研究室所属の辻泰明君などの学生やほかのゼミの学生78名。始発から最終便までの全506便に乗り、1便ごとに乗客がどこで乗りどこで降りたかという利用動向を調べました。「午前4時から午前12時までおよそ20時間、学生たちとバスに乗り続けました」と柿本助教授。そのことを思い出すと、今でも学生たちと苦笑いするほど多大な労力を要した調査でした。赤字が続くバス路線は、補助金がなければ運行できない状況にあります。その補助金が無駄に使われるようでは意味がありません。「調査を行うことで各路線の利用動向を数値化、集客性や生産性を指標化できます。補助金が、必要などころに無駄なく使われるようになるための判断材料のひとつになります」と柿本助教授。バスと鉄道の、発着時刻連携の重要性などの提案も含め、地域住民にとって本当に必要で利便性の高い交通サービスの構築が、柿本助教授と学生たちの研究テーマのひとつです。



左) 芦北調査を担当した屋野君。「芦北の調査では、協力してくれた世帯すべてに手書きの年賀状を出しました」
右) 柿本助教授にアドバイスをもらう大学院自然科学研究科1年鶴丸康二君(中央)。鶴丸君は2005年11月、熊本県下54市町村の自治体にバスに関するアンケートを実施。「地域の活性化には交通の利便性の確保が不可欠だと思います。アンケートを実施して、自治体の方から“考えるよい機会になった”と言ってもらえてうれしかったです」と語った。

「うちの卒業生は、公務員、民間コンサルタント、ゼネコンなど建築関連企業などへ多く進んでいます。調査研究は、アンケート作成や地元との折衝など、調査前の準備にとても苦労しますが、こういった仕事に必ず役に立ちます」と柿本助教授。研究室で築かれた教授と学生たちのつながりは、卒業後もずっと続いていく。

地 域 と と も に 土木計画学 社会基盤計画学研究室

研究成果を地域へフィードバック

地域を知り、地域で学ぶ土木計画学

暮らしやすい町とはどんな町なのか。その答えは一つではありません。
環境、文化、交通の利便性、商業・産業の活気など、重要だと思われる要素は人によって違います。
人々の思いが交錯し、時に感情的な対立も生んでしまう道路づくりや
公共交通システムなどの社会基盤整備において、
地元の意志決定を助けるためそれぞれの地域の客観的データを集積し提供する。
それが、柿本竜治助教授率いる「社会基盤計画学研究室」です。

地域と住民に密着

研究室に所属する大学院自然科学研究科1年屋野英明君は、熊本県芦北地方の山間地の集落で、生活交通調査を行いました。ほかの学生にも手伝ってもらい、430世帯一軒一軒を訪問、一週間毎日、行動記録を書いてもらうよう依頼。「断られることも多かったし、警戒されて消費者センターに電話されたりもしました」と苦労を振り返ります。

調査用紙を回収できたのは420世帯。「調査前は、車を運転しない高齢者の世帯は何らかの交通サービスを必要としているはずだから、この問題に関心が高いと思っていました」と屋野君。「でも、自家用車がある世帯の方がむしろ関心が高く、高齢者の回答には、どこにも行かないから必要ないという意見も見られました。つまり、交通手段がない人たちは、移動することを「あきらめている」のかもしれない。そういった問題点も見えてきました」

芦北は、屋野君の出身地でもありません。「僕も芦北に住んでいる頃は、田舎なから、交通手段はなくて当たり前だと思っていました。でも一軒一軒をまわり、住民と直接話をするとこの調査研究を通して、集落を維持するため

には交通サービスが不可欠だという気持ちになったんです。現在、調査結果を分析し、山間部に適した新しい交通サービスとは何かを探っています。また、地域活性化を話し合う会合などにも参加してもらい、生活交通調査に加え農業実態調査も同時に行うなど、地域により密着した研究を行っています。

同じ土俵で話し合うための「数値」

社会基盤計画学研究室が行っているのは、公共交通など交通サービスの研究だけではありません。「例えば、流通団地の研究があります。現在郊外に増えた大規模小売店は卸売業者を通さず、その影響で卸売業者は業績を下げています。流通団地の中に商業施設を作るといふ案がありますが、それが本当に地域の活性化につながるのか、商業データや交通量の観点からその案の有効性を探ります」と柿本助教は語ります。

地元の利権や、住民の千差万別な考えが絡む社会基盤整備で、価値観が違えば話し合いはいつまでたっても平行線のまま。「現在の問題や将来の経済効果などを、数値」で示すことによって、

人々に同じ土俵で話し合ってもらったとができます。そのために、土木工学と経済学の知識をあわせ試算を重ね、シミュレーションモデルを提示し、「話し合いの接点」を見出す。「第三者」の立場と、学術的調査と見解を兼ね備えた大学研究室の取り組みが、地域づくりの模索の中に有用な考え方の整理をもたらします。



右)雪景色の中行った芦北地区での調査。
左)訪れた学生をお茶とお菓子で歓待してくれた家もあった。データの信頼性を高めるにはアンケート回収率アップが不可欠。それには、郵送などではなく直接訪問することが大切。



朝の4時から夜中の12時まで、1日20時間もバスに乗り続けての調査。このような調査によって、住民にとって本当に利便性の高い交通サービスのあり方を明らかにしていく

※社会基盤計画学研究室には、工学部社会環境工学科、大学院自然科学研究科社会環境工学専攻などの学生たちが学んでいます。

卒業生を訪ねて

自分を制約しない生き方を 平成的ミューハーのススメ

クリエイティブで華やかなイメージから、常に憧れの職業の上位にランクインする広告業界。

競争率数百倍という狭き門を見事突破し、福岡市の大手広告代理店に就職した近藤さんは、現在入社3年目。

熊本大学工学部に進学後、建築士への夢から、現在の広告業界へと方向転換しました。

一見、全く異なる職業のようですが、“多くの人々の力を集結させて、

一つのモノを作り上げる”という基本は同じなのかもしれません。

株式会社 西鉄エージェンシー
コンテンツ本部 CRセンター
コピーライター/CMプランナー/ディレクター

近藤 純 さん

建築から広告の世界へ

高校生の頃、建築家になりたいと思っただけです。当時のドラマで、人気俳優が建築士の役を演じていて、それを見て「かっこいいなあ」と憧れて。ミーハーなんですけど。だから大学は、工学部の建築系に進学しました。大学院1年の終わりまでは、自分でも建築家の道へ進むつもりでした。でも、私はせっかちなので、建築のようにゆっくり時間をかけてモノをつくるのではなく、短いサイクルでモノをつくる仕事もいかな、という気持ちになったんです。もともと絵を描いたり、モノをいじったりするのが好きだったので、建築にこだわらず、クリエイティブな仕事ができればいいと思っただけです。

それで若手でも実力があればすぐに活躍できるこの世界に興味を持ち、毎週末、就職活動で福岡を訪れるついでに、「コピーライター養成講座」を受講してみました。卒業前に、大阪のテレビ局と鹿児島ラジオ局が主催した広告賞で、相次いで受賞。これはプロの世界に飛び込むにあたって大きな自信になりました。競争率が数百倍だった今



近藤さんが手がけた広告。熊本大学の新ロゴもある

の会社に就職が決まった時は、宝くじに当たったような気持ちでした。広告賞受賞など学外での取り組みや、「くまもとアートポリス」の学生団体を主宰したり、卒業設計の「軍艦島の再生」で優秀賞を受賞したりといった、建築だけでなく、多分野での活動と実績をアピールしたことが評価されたのかなと思います。

学生生活が今活かされて

現在、入社3年目。コピーライターやCMプランナー、ディレクターとして、企業のテレビCMやラジオCM、グラフィックなどを制作しています。2年目から、総合的に制作の指揮を取るクリエイティブディレクターを務めさせてもらっています。実際にこの仕事をしてみて、ロジカルな考え方や建設的なスタッフとの関わり方は、建築と共通する部分があると思います。一番楽しいのは、机に向かって企画を考えている時。自分の企画が実際に制作物として完成した時も達成感がありますね。

大学時代は、いろいろなアルバイトを経験しました。建築事務所や土木作業、バーテンダー、イタリア料理店の調理スタッフ、洋服店、カード勧誘、コンサートスタッフ…。これらのアルバイト

トが、いろいろなジャンルの広告を作る今の仕事に生かされていますね。

大学4年生から大学院まで両角・位寄研究室での3年間は、ほとんど毎日研究室で過ごした気がします。研究室に毛布を持ち込んで、仮眠を取りながら論文を書いたりしていましたね。研究のテーマは、「コラボレーション」。複数の人々が関わる協調作業が、どうすれば効果的に機能するかということです。この研究は、現在、クリエイティブディレクターやCMディレクター、アートディレクター、カメラマンなど、多くの人々とともに一つの制作物を作り上げていく上で、非常に役立つと思っています。

“世界”の檯舞台にチャレンジ

学生の中には、「目標が見つからない」、「どんな仕事かしたいかわからない」という人もいます。けれど、

ど、何気ない日常生活の中にも、将来像の原点はあるのではないのでしょうか。

最初に、ドラマの主人公に憧れて建築の道を目指したと言いましたが、私はミーハー心も大いに結構だと思っています。子どもの頃、テレビのヒーローに憧れたのと同じですよ。例えば目標や就職活動も、「こうでなければいけない」と自分でいるんな制約をつけずに、単純になりたい将来像に向かって突き進んでいけば、その先にきっとリアルな将来像が見えてくると思います。

今後は、テレビCMの仕事を増やしながら、国内の広告賞はもとより、栄誉あるカンヌやニューヨークの広告祭を狙ってみたいですね。賞が全てではありませんが、自分のクリエイティブに対する反応を確かめる場はなかなかないですし、仕事のモチベーションを上げていくためにも、積極的に賞にチャレンジしていきたいと思っています。



PROFILE

近藤 純(こんどう・じゅん)

1978年、福岡市生まれ。熊本大学工学部環境システム工学科建築系を経て、2004年に熊本大学大学院自然科学研究科建築学専攻を修了。同年、(株)西鉄T-ジェンシーに入社。現在、入社3年目。

International exchange

国際交流

熊本大学から 世界をめざす学生たち

国際学会で研究発表したり、海外渡航して研究活動に取り組んでいるのは
教員たちばかりではありません。

熊本大学では、大学院の学生たちもこうした国際舞台で活躍。

自らの力を試し、グローバルな視点で研究を深めています。

今回は、熊本大学から国際奨学金を受けて海外活動を実現させた大学院生たちを紹介します。

Reo ikawa



Kenichi tsujita



Yasushi iwabuchi



「恥をくなくら…」

大学院自然科学研究科博士後期課程2年の井川怜欧(れお)さんは、学会に発表したアブストラクトが認められ、2005年6月、ノルウエー・ベルゲンで開かれた、源流域についての国際学会「Headwater 2005」で、研究発表を行いました。

「国内学会での発表経験はありましたが、国際会議は参加するの初めて。それなのに、発表だなんて。もちろん緊張しました」という井川さん。その様子を見て、指導教官の嶋田純教授はこんな言葉をかけたそうです。「年を取っていれば、それだけでキャリアがあると思なされ、人の目も厳しくなる。恥をくなくなら、若いうちだよ」

学会で発表した研究テーマは「The evaluation of the infiltration through stemflow in a warm-humid forested catchments. (温暖湿潤山地源流域における樹幹流の果たす役割の定量的評価)」。雨が木を伝って地面に入る「樹幹流」の量を、川の源流域の水質を調べて計測し、森の木々が雨の涵養にどれほどの役割を果たしているかを定量的に評価します。大きな河川がいくつもの国をまたがって流れる大陸の研究者の多くが、水をどう保護し、活用するかと

いう国家的なプロジェクトに関心を向ける中、井川さんの研究は水に恵まれた日本の自然状況を広く知らせるとともに、新しい視点の提案になったようです。

「語学力を含め、よくも悪くも自分の実力が見えました。いろんな発表を聴講したり意見交換したりする中で、日本にいたるだけでは思いつかないだろう発想や研究に触れることができました」という井川さん。研究のモチベーションを高める契機となりました。

研究分野の第一人者から 助言や指導も

「初めてのときは、自分の発表をうまく終わらせることしか頭にありませんでした。でも、3度めだった今回は、他の発表者に突っ込んだ質問をする余裕を持ってました」といのは、大学院医学教育部臨床医科学専攻博士課程4年に在籍する辻田賢一医師。臨床医となつた後、再び大学院に戻り、研究を進めています。

「3度め」は、2005年11月アメリカ・ダラスの学会「American Heart Association Scientific Sessions 2005」。辻田さんは、急性心筋梗塞の患者が治療で受ける酸化ストレスでかえって障害が増大するケースがあるこ

とに着目。再灌流治療の直前に抗酸化剤を使うことによつて酸化ストレスを軽減し、梗塞サイズを縮小する効果があることを証明し、発表しました。

「国際学会は世界中の研究をまとめて見聞できる場であり、まだ雑誌にも載っていない最新の研究に触れる場でもあります。また、その分野の第一人者の研究者が多く集まっているので、早いうちに発表の機会を与えてもらえる」と、その分野の第一人者から直接指摘や助言を受けられ、その後の研究活動に大きな力になりますね。辻田さんも若いうちに国際学会に参加し、研究発表する意義を実感している一人です。

フランスの地方分権を 実地研究

一方、大学院社会文化科学研究科博士後期課程3年の岩淵泰(やすし)さんは、2006年6月から、フランス・ボルドーのモンテスキュー大学ボルドー政治学院に1年間留学、フランスの地方分権について調査研究をする予定です。

「フランスは、東京と同じようにパリに政治経済が一極集中している中央集権国家ですが、今、地方分権政策が進められています。簡単に比較はできませんが、フランスの実態を自分の目で確

かめ、現地の人々の声を直に聞き取つて研究することは、日本の分権政策を考える上で大きな参考になると思えます」と留学の目的を語る岩淵さん。2004年3月、伊藤洋典法学部教授に同行し、ボルドー政治学院を初めて訪問。「いつかはここで地方分権政策の研究を深めたい」と思つて以来、昨年は大学の国際奨学金を得て短期滞在するなどの渡仏経験を重ねてきたことも、今回の留学につながりました。

「留学には受け入れ先の教官の承諾が必要です。ただ、学生の受け入れにはリスクもあり、承諾をもらうのはそう簡単ではありません。僕は、留学先で指導していただくClaude Sobras(クロウド・ソルベ)先生が2005年11月に熊本大学に来られた時、直接お願いすることができ、了解をいただきました」といふ岩淵さん。フランス語の習得には、大熊薫文学部教授のバックアップを得て猛勉強。学部生の授業にも参加させてもらいました。

「僕はラッキーでした。先生たちには本当に感謝しています」と笑顔の岩淵さん。「将来は何らかの形で地方分権政策に携わりながら、日本とフランスをつなぐ人間になりたいと思います」。夢の第一歩を歩み始めます。

女性研究者が活躍できる熊本大学へ

文科省「女性研究者支援モデル育成」事業に本学提案課題採択

育児や介護に直面した女性研究者が研究活動を中断したり、辞退したりするケースをなくそうと、文部科学省が公募した科学技術振興調整費の課題プログラム「女性研究者支援モデル育成」事業に応募。この事業では全国で10校が採択され、本学の「地域連携によるキャリアパス環境整備」もその一つとして選ばれました。



ES細胞に関する最先端の研究を行う糸昭苑教授

このモデル事業では、熊本県、熊本市や子育て支援NPO、地域企業などと緊密に連携しながら、①全学的な男女共同参画の推進とコーディネーター制度の創設、②勤務体制に関する環境整備、③研究と育児等を両立するための研究代替員の対応・研究費の予算配分としての助成、ITを使った在宅勤務のサポート、④地域連携・人材データバンク化によるキャリアパス創出、⑤全学的な保育援助システムの整備の5項目を柱に、制度や意識を改革、キャリアパス環境整備を目指します。

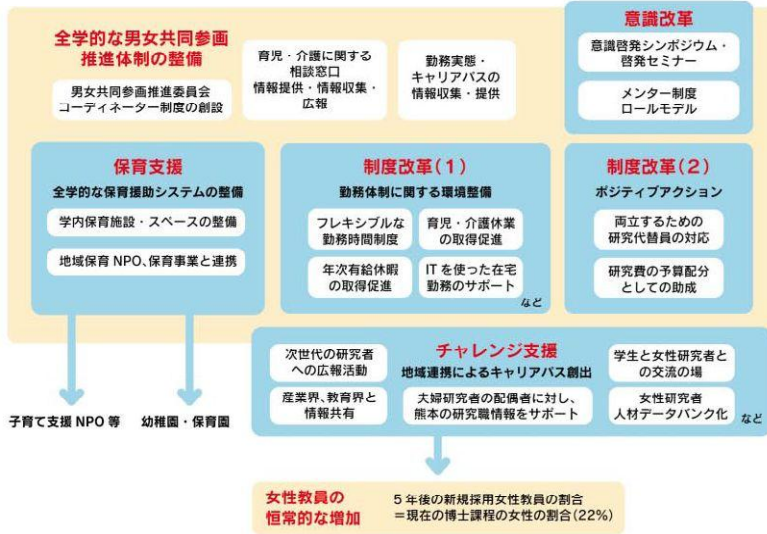
この事業で構築した女性研究者の育成支援体制は3年間の

モデル事業終了後も維持。5年後には、新規採用の女性教員の比率を22%まで引き上げる（現在の女性教員の比率12%）ことなどを目標にしています。女性研究者にとって「優しい」教育・研究環境は、すべての研究者にとって満足度の高い教育・研究環境。熊本大学の新たな挑戦の一つです。

熊本大学における女性研究者支援

地域連携によるキャリアパス環境整備

実施内容



「第一回土木計画学公共政策デザインコンペ」で「黒川賞」を受賞

熊本大学大学院自然科学研究科の岡本欣久さんたち大学院生と熊本大学まちなか工房の幹事会が合同で研究した「中心市街地の時間貸し平面駐車場の有効活用のための方策と支援策の提案」が2006年6月、「第一回土木計画学公共政策デザインコンペ」で、最優秀賞にあたる「黒川賞」を受賞しました。

このコンペは、社会基盤を支える土木工学を学ぶ学生たちを対象に、構造物や施設の機能の研究だけではなく、施設の使われ方や合意形成、維持管理などをトータルにデザインすることの大切さや面白さを知ってもらったともに、学生たちの創造性を発揮できる機会にしようと今年から創設されました。「黒川賞」は、審査員の一人でもある早稲田大学客員教授の黒川洸氏名による表彰で、同コンペの最優秀賞にあたります。この栄えある賞の受賞で、中心市街地活性化における本学の研究に寄せられる期待はますます高まっています。



8月8日(火) オープンキャンパス開催



8/8 TUE.

OPEN CAMPUS

黒髪キャンパス

文学部

開催時間 13:00~16:00

集合時間 12:50

集合場所 文・法学部 A1 B1 A2 B2 教室

黒髪キャンパス

教育学部

開催時間 午前の部 10:00~12:00
午後の部 13:00~15:00

集合時間 午前の部 9:50 / 午後の部 12:50

説明会場 418 219 318 117 教育学部 345

黒髪キャンパス

法学部

開催時間 10:00~12:00

集合時間 9:50

集合場所 文・法学部東側玄関

黒髪キャンパス

理学部

開催時間 10:00~15:00

集合時間 午前の部 9:50 / 午後の部 12:50

集合場所 理学部玄関前

黒髪キャンパス

工学部

開催時間 9:30~15:10

受付時間 午前の部 9:00~ / 午後の部 13:00~

受付場所 工学部2号館 1階ロビー

対象: 高校2年生以上

本荘・九品寺キャンパス

医学部医学科

開催時間 9:30~12:00

集合時間 9:20

集合場所 医学部基礎第一講義室

本荘・九品寺キャンパス

医学部保健学科

開催時間 午前の部 10:00~12:10
午後の部 13:30~15:40

受付時間 午前の部 9:30~ 9:50
午後の部 13:00~13:20

受付場所 保健学科玄関ロビー

対象: 高校2年生以上

大江キャンパス

薬学部

開催時間 13:00~15:30

受付時間 12:15~12:45

集合場所 薬学部正面玄関

対象: 高校2年生以上



同時開催

九州・山口地区 国立大学進学説明会

開催時間 10:00~16:00
開催場所 熊本大学大学教育センター1階特設会場

地元熊本にないから、他県の各国立大学の様々な入試情報を得るチャンスです。皆さん奮ってご参加ください。

個別相談ブース

各国立大学の入試関係教職員が、参加者からの各種相談・質問などにお答えします。

参加予定大学

九州大学 佐賀大学 長崎大学
宮崎大学 鹿児島大学 琉球大学
山口大学 熊本大学

資料配布コーナー

各大学・学部等の概要、資料などのパンフレット類を自由に持ち帰ることができます。

福岡教育大学 九州大学 九州工業大学
佐賀大学 長崎大学 大分大学
宮崎大学 鹿児島大学 鹿児島体育大学
琉球大学 山口大学 熊本大学



Kumamoto University

国立大学法人 熊本大学

学務部入試課

〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号 Tel.096-352-2146 Fax.096-345-1954
E-mail:nyushi@jimu.kumamoto-u.ac.jp http://www.kumamoto-u.ac.jp/

Book
Vol.13

おすすめの一冊



「中谷宇吉郎随筆集」

「中谷宇吉郎随筆集」樋口敬二・編、岩波文庫・緑 124-1。
(中央図書館および各分館・蔵)



附属図書館長
大学院医学薬学研究部教授
中山 仁

“随筆「立春の卵」は、「立春に卵は立つか」という命題をめぐるおもしろい話である。”と書くと、イースター・エッグの話か、はたまたコロンブスの卵の話の焼き直しか、と思われるかもしれない。しかし、これは人工雪を世界で初めて作り(1936年)、北大・低温科学研究所の創始者でもあった中谷宇吉郎先生の書かれた随筆集の中の一文である。本書にはこれに加え、

「千里眼その他」や人工雪創製の経緯を書いた「雪を作る」、そして寺田寅彦の名言「天災は忘れた頃来る」の出自など恩師・寺田寅彦に関する興味深い話も含め、40篇が収められている。いずれも、寅彦譲りの平易な表現の中に、洞察の深さがうかがえる名文である。

人工雪創製の過程で、空中の温度と湿度の条件に応じて「六華」または「六花」とも謂われる雪の結晶が規則的に変化すこ

とを見出したが、これを逆にたどると、天から降ってくる雪の結晶観察から上空の気温や湿度が推測できることになる。これを博士は、「雪は天から送られたメッセージである」という詩情豊かな言葉で表現しておられる。豊かな感性に加え、博士が科学者としても偉大だったのは、「現象をよく見て、それを実験室で再現すること」、「風土にあった研究をすれば必ず役に立つ」との信念の下、雪結晶から霧退治、洪水調査まで、多彩な活動を繰り広げたことである。専門は違っても、時代を超えて未だに教えられるところが多い。

冒頭の命題の結論は、読者諸兄姉への礼儀として、ここには明かさない。ただ博士は、「立春の卵の話は、人類の盲点の存在を示す一例と考えると、なかなか味のある話である。これくらい巧い例というものは、そうざらにあるものではない。」と締めくくっている。卵の謎解きも含め、いずれもが滋味あふれる名随筆である。文系・理系、世代を問わず、是非一読をお薦めしたい。

熊本 新哲学の道

市街地の坪井川治いを歩く



熊本市役所前近くの長堀通りを坪井川下流に向かって歩くと、右手に全長242mの日本一の長さを誇る長堀を眺めながら、街中の喧騒から離れて安らぎや城下町の風情を感じることができます。眼下に泳ぐ色鮮やかな鯉、春には満開の桜や楠若葉が通る人の目を楽しませてくれます。気候の良い頃にはベンチで友人とランチを食べたり、休息をとったりする若い人たちも見られます。

行幸橋を渡って市民会館横から坪井川遊歩道に入ると、ちょうど今の季節は木々が青々と茂り、木陰が暑い日差しを遮ってくれます。川面からの風は涼しく何だかゆっくりと時間が流れているようです。遊歩道が終わり道路に抜けると、民謡「あんたがさどこさ」で有名な船場橋に出ます。

この辺りから加藤清正が作った商人の町古町界隈となります。見所は知る人ぞ知る唐人町通りの街並み。戦火を免れた建物が残っており、歴史的建築物や、寺院、めがね橋などがあります。大正八年建築の旧第一銀行跡(ピーエスオランジュリ)や通潤橋を建築した橋本勘五郎の手による明八橋、明十橋(明治八年、十年築)が有名です。

また、通り治いのお洒落なレストランや雑貨屋なども街並みに調和し、これまで知らなかった熊本に出会えるかもしれません。他県ご出身の方々はもちろん、熊本出身の方々にも是非散策してもらいたい界隈です。

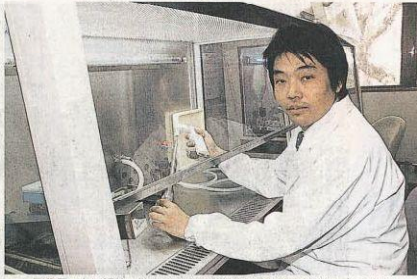
さらにこのまま熊本駅方面に歩いていくと北岡神社や北岡自然公園などで自然散策を楽しむこともできます。

歴史や風情を楽しむもよし、安らぎを求めるもよし、または健康づくりやダイエットなどいろんな散策の楽しみ方ができそうです。

今、坪井川流域では、当センターの「坪井川サイエンスショップ」をはじめ、住民と関係団体が連携したさまざまな取り組みが始まっています。

(政策創造研究センター 吉住 修)

アスピリンやインドメタシンに続け



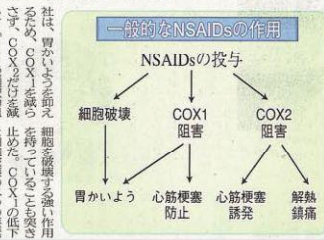
副作用のない解熱・鎮痛薬の開発を進めている水島徹教授—熊本大学

熊本から世界へ
非ステロイド系 抗炎症薬

アスピリンやインドメタシンは、非ステロイド系抗炎症薬（NSAIDs）と呼ばれ、解熱や鎮痛、抗炎症作用に普及している。アスピリンは、心臓病（心筋梗塞）の予防作用も、命にかかわる場合もある。熊本大学薬学部の水島徹教授は、このNSAIDsの新たな開発に取り組んでいる。熊本大学薬学部の水島徹教授は、このNSAIDsの新たな開発に取り組んでいる。

副作用なく解熱、鎮痛

熊本・水島教授 開発を進める



4/24 熊本日日新聞

熱と電流で内臓脂肪減少／糖尿病など治療に応用も

熊本大学大学院教授
甲斐 広文氏



「かいらい」は、熊本大学大学院教授甲斐広文氏が、糖尿病や肥満、高血圧、脂質異常症などの治療に役立つと期待されている。甲斐教授は、熱と電流を用いた治療法を開発し、内臓脂肪の減少を促すことができた。この治療法は、糖尿病や肥満、高血圧、脂質異常症などの治療に応用される可能性がある。

3/27 熊本日日新聞

論壇



都市圏間競争の時代

熊本大学教授 上野 眞也
都市圏間競争の時代。熊本大学は、都市圏間の競争の中で、独自の強みを発揮し、地域社会に貢献していく必要がある。上野教授は、都市圏間の競争について、熊本大学の役割を論じている。

4/30 熊本日日新聞

「水保病データベース」公開

熊本大学が、水保病に関するデータベースを公開した。このデータベースは、水保病の発生メカニズムや予防策に関する情報を提供し、水保病の対策に役立つ。公開されたデータベースは、水保病の発生メカニズムや予防策に関する情報を提供し、水保病の対策に役立つ。

5/1 熊本日日新聞

編集後記

本学生が、以前私が所属していた会社の内定を決めた。外資系の広告会社である。それを記念し、合格した本人、仲間、担当の先生、そして私で居酒屋に集まり、お祝をした。内定した学生には「おめでとう。だが、これからが大事」と励ました。その後、先生と仕事中心の話になった（オヤジですね）。——と、帰り際に泣き出ししている女子学生が（女子学生の涙というのは、20年前の自分の卒業式以来見ていない）ードキッ。でも、なぜ？理由は…「先生たちの話をきいていて、漠然と、自分のサークル活動に自信を失い、悔しくて涙がでてきた」。

彼女はまた3年生。大学のアイデア会議でも、男子学生より活発に自分の意見を言える学生だ。「熊大はいい学生を抱えている」。直感的に私は思った。「憧れではなく現実を、他人事にせず自分事に」物事を感じられる人間は、将来必ず成長する。

私も広報戦略について半年。失敗や自信をなくすことばかり！

「いつとも自信をなくしたり、逆に自信をつけたり」しながらも、最後に笑っていたいよね！「熊大生」頑張ってます。

(広報戦略主幹 西村 兆司)

編集委員

- (委員長) 上野眞也 政策創造研究センター
- 佐藤毅彦 教育学部
- 桑 和彦 発生医学研究センター
- 田中尚人 大学院自然科学研究科
- 西村兆司 広報戦略主幹

熊本大学広報誌
熊大通信
KUMADAI TSUSHIN

皆様のご意見・ご感想をお寄せください。
2006年7月発行 編集/熊大通信 WG 発行/熊本大学
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号 TEL.096-342-3119 FAX.096-342-3007
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学公式ホームページ
http://www.kumamoto-u.ac.jp/

教育は建国の基礎にして、 師弟の和熟は育英の大本たり

明治 32 年、32 歳の夏目漱石が、
五高開学 10 周年記念式典で述べた祝辞の一節です。
文豪・漱石は教師としても優れ、
後に物理学者となる寺田寅彦が漱石を慕い、
書生にしてくれと頼んだ話は有名です。
漱石をはじめ優れた教師たちと、
その薫陶を受けた幾多の人材。
漱石の熱い教育への思いは、
そのまま五高・熊本大学の思いであり、
脈々と受け継がれてきた伝統です。
この大いなる伝統を引き継ぎ、
さらに輝かしいものとするために、
今、熊本大学ユニバーシティ・ミュージアムは
始動しました。

富重利平撮影
富重写真所蔵



熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム

五高記念館は国の重要文化財に指定され、本学のシンボルとなっています。このほかにも、重要文化財等の赤煉瓦建物群や登録文化財となっている建物、また、他のキャンパスで保存・活用されている施設があり、これらの建物・施設・資料等から成る熊本大学博物館の実現を目指しています。その第一歩として、平成 18 年度から五高記念館の整備に着手し、高等教育研究資料館としての個性を持たせ、ラフカディオ・ハーンや夏目漱石など、いくつかのテーマごとに史・資料の整備を進め、展示・公開できるよう計画しています。

